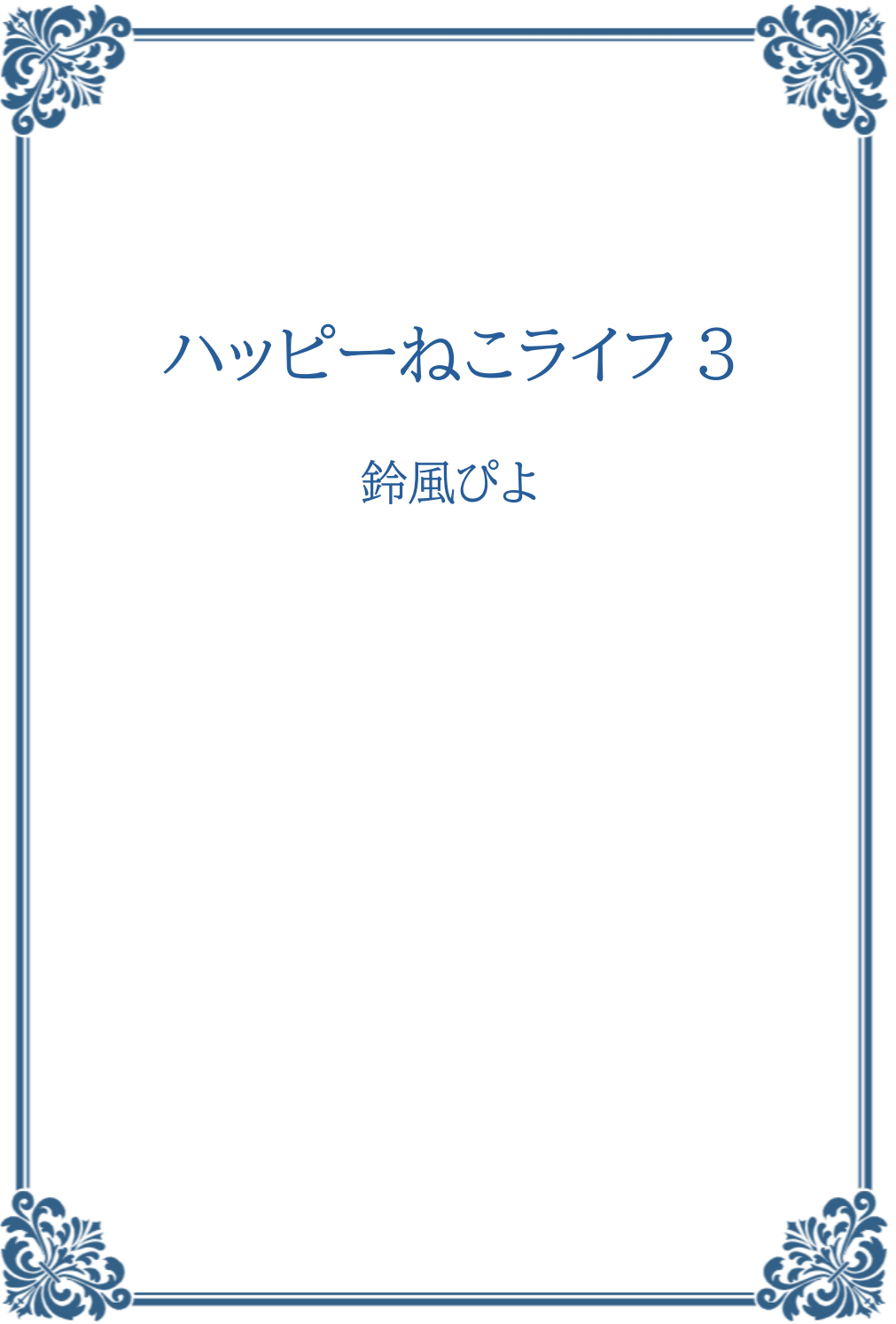




ハッピーねこライフ 3

鈴風ぴよ

「ただいまー」

僕の名前はゆうき。

大学1年目の夏休み、僕は地元静岡県函南町に、大学で知り合った女の子すみれちゃんと一緒に帰省した。

「おじゃまします」

緊張してる小さい声で言ったすみれちゃんは可愛くて、大丈夫だよって抱きしめなくなる。

「おかえりー、すみれちゃんも来てくれてありがとね」

お母さんが、よそ行き声でニコニコと出迎えてくれた。

すみれちゃんのこと、家族には大学の同級生の女の子と一緒に帰るとしか伝えてないけど、お母さんにはすぐに「彼女？」って聞かれた。

「違うけど」って言ったけど、すみれちゃんが彼女だったらどんなに良いことか！

「夏休み沖縄帰らないつもり」

その時の話の流れでそうって言ってたすみれちゃんに

「僕は帰省するけど、良かったら静岡来てみない？」

って、勇気を出して誘った僕を自分で褒めたい。

心臓がバクバクして、酸欠になりそうな息苦しさを感じながら、それを悟られないように必死だった。

「えー、マジで言ってる？」

「うん、ばあばが使ってた部屋だけど空いてるし」

「ばあば？」

「あ、うん、言わない？」

とっさに出てしまった言葉が恥ずかしくて耳がカアツと熱くなる。

きつと真つ赤な顔してる自覚があつたけど、すみれちゃんは僕が飼ってる猫のしろにゃんを優しく撫でていてこっちを見てなくてホツとした。

「おばーって言う、私おばーに育てられたようなもんだから、おばー大好きだったんだ」

「そうなの？」

初耳だ。

「うん、親仕事忙しくて、小さい頃よくおばーの家いたけど、中学の時病気で死んじゃった」

「えっ」

すみれちゃんの悲しい思い出に急に触れて、僕は何て言ったら良いか分からなかった。

「ゆうき君のおばーどうしたの？」

「あー、うちは元気だけだいたいぶポケちゃって、去年近くの施設に入ったんだ」

「そっか。ねえ、おばーが飼ってた猫見る？」

「見る見る」

暫くスマホを弄って高速でスクロールしてから見せてくれた画面に、長い髪を2つに縛って、白黒の猫を抱いている小学校低学年位の女の子が映ってた。

大きな瞳に面影があつて、すぐにすみれちゃんだって分かった。

シヨートヘアしか知らなかったけど、ロングも似合うんだな。

「可愛いねー」

思わず出た言葉に、自分でドキっとした。

「でしょー。うみちゃんて言うの、海で拾って」

あ、そっちな。うん、確かに可愛い。

てっきり猫の事だと思ってるすみれちゃんが一番可愛いけどね。
すみれちゃんの沖縄での暮らしがちょっと知れて嬉しかった。

「しろにゃんも帰ったよ」

しろにゃんも久しぶりに実家に帰省だ。

僕が小学生の頃に拾った時には成猫だったから何歳か分からないけど、おばあちゃん猫のしろにゃんは最近寝てばかりいる。

電車の中でもキャリーゲージの中でおとなしくしていた。

「しろにゃんおかえり」

お父さんがゲージを受け取って、慎重にしろにゃんを出してあげる。

リビングに降ろされたしろにゃんは、まるで久しぶりじゃないみたいにリビングを優雅にゆっくり歩いてお気に入りの出窓に跳び乗った。

「ちゅーるあげようね」

「みー」

お父さんが猫撫で声で嬉しそうにちゅーるでご機嫌を取ってる様子が可笑しくて、すみれちゃんと顔を見合

わせて密かに笑い合った。

ゲージからしろにゃんが好きなクッションを出して出窓に置いてあげると、しろにゃんはクッションの匂いをかいでからそっと乗って、毛づくろいしてから丸くなって寝て、お父さんは目を細めてしろにゃんの丸い背中を撫でてた。

しろにゃんはうちのアイドルだ。

僕が小さい頃から淋しい時には寄り添ってくれたり、叱られた時に慰めてくれたり、まるで人の気持ちが分かるみたいだ。それに、僕とすみれちゃんが最初に話すきっかけになったのも、しろにゃんの存在だ。

インスタに載せたしろにゃんの写真に、すみれちゃんがイイねしてくれたんだ。

「ご飯支度しとくから荷物おいといて」

お母さんに促されて、すみれちゃんを案内する。

ばあばの部屋にすみれちゃんがいるのは不思議な感じだった。

「ゆうき君の部屋どこ？」

「僕は2階」

行ってみる？ って聞きたかったけど、すみれちゃんは

「ふうん」

って自分で聞いたのに興味薄そうな返事で、僕は途端に意気地無しになって聞けなかった。

夕飯はカレーライスと平井のスイカだった。

すみれちゃんに、函南町はスイカの名産地なんだって教えてあげたりしながら、久しぶりに食べたスイカは冷えてて甘くて最高に美味しかった。

すみれちゃんが食器洗いを買って出てくれて、お母さんと話しながら台所に立ってるのがまた、あり得ない光景過ぎて戸惑う。

いつかこんな日が来たらなんて思った事もなかった。

だってまだ告白もしてない！

帰省をこの週末にしたのは訳があつて、しろにゃんの名前の由来になった、かなみ猫おどりっていうお祭りが開催されるんだ。

すみれちゃんが行きたいって言ってくれたこのお祭りで、告白できたらと思ってる。

そしてもし、もし付き合えたら！

いやいや、まずは伝えるだけ目標にしよう。

冷静になれ自分！

テレビを見てるお父さんの近くで僕も見てるフリをしながら内容が全く頭に入って来ない。

「みいー」

しろにゃんが、まるで「落ち着きなよ」って言ってるかのようには鳴いて、僕の膝にピョンと跳び乗って来た。

香箱座りでちょこんと座ったしろにゃんを撫でていると穏やかな気持ちになる。

猫おどりでは、しろにゃんっていう可愛いご当地キャラクターが居て、盆踊りみたいな曲に合わせて踊る着ぐるみのしろにゃんがまた可愛いんだ。

元はいえ、丹那に人語を理解して踊ったり笛を吹いたりしたシロっていう猫がいた伝説があるらしいけど、うちのしろにゃんも人間の言葉が分かっていると思う。

僕はしろにゃんを撫でながら、すみれちゃんがお母さんと何やら和やかに話してる様子を伺っていた。

すみれちゃんに先にお風呂に入ってもらって、出て来たすみれちゃんに明日のお祭り何時に行こうって話を
して、おやすみなさいって別れた。

家にすみれちゃんが泊まってるなんて信じられない。

僕もお風呂入ってから自室に戻ってスマホを見ると、すみれちゃんからLINEが来てた。

『緊張して寝れない』

あー、そりゃそうかあ。

『ヒツジ数えたら』

って送ったら、すぐ既読になってヒツジのスタンプが来た。

僕は一人で笑って、同じヒツジのスタンプを2つ送った。

そしたら3つ来て、4つ返して、5つ来て、6つ返して、7つ来て、すみれちゃんから

『これいつまで続くの』

って来て笑った。

『寝るまで』

そしたら草のスタンプ。

笑える時にすみれちゃんがいつも送って来るやつだ。

僕は今度は猫のイラストのスタンプを送った。猫おどりのしろにゃんのスタンプだ。

『しろにゃん?』

『そ』

『スタンプあるんだ欲しい』

そんな事言われたらあげるしかない。

すぐにスタンプをプレゼントで送ったら、しろちゃんのスタンプで

『ありがとにゃん』って来て、可愛い過ぎて悶絶した。

遅くまでLINEし合って笑って、僕のLINEが既読にならなくなってから、満たされた気持ちでベッドに入
った。

真夏の午後は家から函南町役場までの5分歩いただけで汗だくだ。すみれちゃんはハンディ扇風機をずっと
顔に当ててた。

役場からシャトルバスで猫おどりの会場、川の駅伊豆ゲートウェイ函南まで行く。

すぐ近くに、めんたいパークっていう明太子の工場と直売所があって、誰でも工場見学が出来るのを前に家
族で行って知ってたから、まずは涼みがてめんたいパークに入った。

「何これ面白い」

巨大な明太子を持ち上げてるかのように写真が撮れるフォトジェニックなコーナーは、きつとすみれちゃん
好きそうと思ってた通り気に入って、交代しながら沢山写真を撮った。

僕は顔をしかめて明太子を重たそうに持ち上げてる演出をして、すみれちゃんが爆笑してくれて気分が良か
った。

売店で並んで明太子パスタと明太子お握りを2つずつ買って、人が多くてやっと見つけたイートインスパー

スの空席の小さなテーブルに向かい合わせて食べた。

すみれちゃんはパスタとお握りも写真に撮ってた。

「インスタ載せていい？」

「僕はいいけど、全国のすみれちゃんファンに殺されない？」

「そんなのいないし」

すみれちゃんは笑ってるけど、いつもコメントしてるアイツもアイツもすみれちゃんを狙ってるの知ってる。

ライバルが多いんだ。

「いるよ」

目の前にも、すみれちゃんの大ファンが。

僕がそう言ったら、すみれちゃん何て言うだろう。

告白しようって決めてたのに、いざとなると言葉が出て来ない。怖い。胸がドキドキし過ぎて酸欠を起こしそうだった。

「み、水、取ってくる」

口から出たのはそんな言葉で、慌てて立ち上がった椅子がガタンと音を立てた。

「ミミズ？」

ああ、やっちゃった、もうダメだ。

恥ずかしさに消えなくなりながら、足取り重く給水機で紙コップ2つに水を入れて戻った。

「ミミズありがと」

そう笑いながらコップを受け取ったすみれちゃんは可愛いくて。
もう僕はずっと、すみれちゃんのミミズでいいや、と思った。

川の駅は凄い賑わいだった。

堤防の下の広いスペースに沢山の屋台やキッチンカーが出ていて、暑い中、子供も大人も皆楽しそうだった。

「かき氷食べたい」

かき氷の絵の幟を指差して目を輝かせてるすみれちゃんも可愛いくて、この瞬間を忘れまいと心の中で何度もシャッターを押した。

一緒に行列に並んでかき氷を2つ買って、ゆっくり食べられる所を探して人混みから離れて堤防の上まで上がった。

舗装されたアスファルトの小路と堤防の境に座ってる人達に倣って、少し離れた所に僕達も座って会場全体を見下ろしながらかき氷を食べた。

特設ステージではお揃いの衣装を着た子供達が並んでる。

「あ、しろにゃん来た！」

司会に手を引かれてステージに登場したしろにゃんに興奮してるすみれちゃんも可愛い。

猫おどりの曲が流れて、子供達としろにゃんが踊り出した。

「可愛いー！」

スマホでムービーを撮り出したすみれちゃんも可愛い。

僕は少しだけすみれちゃんに頭を寄せて、すみれちゃんが撮ってる画面と一緒に見た。

もう少しで触れそうな距離。

自分の心臓の音がうるさい。

曲が終わってすみれちゃんが録画を止めたタイミングで少し離れる。

「ふふ、可愛いかったね」

「うん」

すみれちゃんがね。

ステージでは司会の人が何か言ってて次のグループがお揃いの法被を着て猫のメイクで登場した。今度は会場の皆で一緒に踊るらしい。

しろにゃんも誘導されてステージから下りて、大きな輪に入って踊り出す。

「すみれちゃんも踊って来る？」

「いい、見てる」

楽しげにお祭りを見るすみれちゃんを、ずっと見ていた。

いつの間にか堤防の上で座る人達が増えて、僕達が座ってる近くまで来た若いカップルが平らな所に座るのを諦めて少し下の斜めの堤防に体育座りで座った。

「可愛いなー」

見てたすみれちゃんが呟く。

「私も浴衣着てくれれば良かった」

カップルの女の子が着てる浴衣が羨ましかったらしい。

頑張れ自分！残念がつてるすみれちゃんを今こそ励ますんだ。

「すみれちゃんは浴衣着てなくても可愛いよ」

ドキドキを隠して何とか嘯まずに言えた。

「えー、ありがと」

両手で頬を押さえて恥ずかしそうに笑ったすみれちゃんの可愛さといったら堪らなくて、心のシャッターを押して胸に刻み込んだ。

僕は顔が熱くて、きつと耳まで赤くなった。

照れ臭さに耐えられず目線を移すと、カップルが寄り添って肩を抱き合っているのが見えてしまつて余計に恥ずかしかつた。

すみれちゃんも、カップルを見てる。

「ゆうき君でさー」

「な、に？」

唐突に呼ばれて心臓が跳ね上がる。

「彼女欲しいとか思う？」

何その質問、何て答えるのが正解なの？

「・・・正直、思うよ」

「私、立候補していい？」

「えっ!？」

ヤバイ、心臓が破裂する!

時間が止まったかのようなだった。キーン、つて耳鳴りがして一瞬何も聞こえなくなる。

「・・・ダメ？」

すみれちゃんが返事を促す声が小さく聞こえた。

「ダメじゃない！」

声のボリュームを間違えてしまい、大きな声に驚いた顔したすみれちゃんに、ハッとする。耳鳴りが治まって来て、小さな声で言う。

「ごめん、間違えた」

「え、ダメってこと？」

すみれちゃんの大きな瞳が潤んで泣きそうだった。

「違くて、あーもう、僕から言おうと思ってたのに、ごめん」

僕の馬鹿！意気地無し！ちゃんと言わなきゃ。

「すみれちゃんが好きです。付き合って下さい」

そっと差し出した手を握ってくれたすみれちゃんの手は、温かくて柔らかかった。

「私もゆうき君が好き。嬉しい、泣きそう」

「泣かないで」

近くのカップルみたいに、すみれちゃんの肩を抱き寄せた。

「だって、断られたらどうしようって、怖かった」

すみれちゃんも同じように怖いと思ってくれてたんだ。

「ありがとにゃん」

しろにゃんのスタンプを真似て言ったら、すみれちゃん笑ってくれた。

ステージではカウントダウンが始まっていた。
夕陽が沈み切らない薄明るい空に、最初の花火が大きく打ち上がった。

「ハッピーねこライフ」シリーズの 1 作目・2 作目は
以下の二次元コードから読むことができます。

1 作目



2 作目



ハッピーねこライフ 3

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 すずかぜ 鈴風びよ

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関する事）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

夏休み。大学生のゆうき
君は、飼い猫しろにちゃんと
地元函南町に帰省する。ひ
よんな事から同級生すみれ
ちゃんも一緒に付いてくる
ことに。人間の気持ちが分
かる猫しろにゃんがハッピ
ーを呼ぶ、ねこと少年の物
語第3弾。

